談話室 (世界化学年)

女性科学者のつぶやき

川 合 眞 紀^{1,2}¹東京大学大学院新領域創成科学研究科
☎277-8561 千葉県柏市柏の葉5-1-5²理化学研究所
☎351-0198 埼玉県和光市広沢 2-1

(2011 年 7 月 1 日 受理)

Murmuring of a Woman Scientist

Maki KAWAI^{1,2}¹The University of Tokyo, Kashiwa, Chiba 277-8561²RIKEN, Wako, Saitama 351-0198

(Received July 1, 2011)

マリーキュリーが残した研究ノートは今でもパリの研究所の講義室の一画に残されています。直筆のノートには研究者マリーキュリーの日常が垣間見られ、偉業も毎日の積み重ねが基本であることに改めて気付かされます。マリーキュリーのノーベル化学賞受賞 100 年に当たる今年は国際化学年と位置づけられ、各国で記念行事が行われています。女性の社会的地位の価値基準は当時とは比べ物にならないのですが、日本の女性科学者の比率は相変わらず低く、先進諸国中最下位をキープしています。かつては女性の雇用に消極的だった大学や企業も今ではむしろ獲得競争の様相を呈しており、採用側には性差別の意識はなく、むしろ逆差別に対する修正が必要となりそうな勢いです。女性比率 30% の目標もその数値の是非はともかく、意識改革には貢献しているのでしょうか。一方、博士取得者中の女性比率は相変わらず低く、研究者のリソースである母集団の比率が上がらないのは我が国の抱える本質的な問題です。生命科学・医学、薬学などのソフト系材料や資格取得につながる研究分野での博士取得者がおおむね 25% であるのに対し、物理・化学そして工学分野での比率は 10% を越えておらず、総数中の比率は昨年度末の数値でも 18% 程度に留まっています。社会の意識改革も順調に進んでいるようですし、男女共同参画の推進で保育園の整備や産休や育児に伴う代替の考え方の理解など、働きやすい環境整備も進んできています。こういった環境整備が進んでいること

の宣伝も十分とはいえないまでも公知されていると思います。それなのに、女性比率の向上が思うように加速されないのは何故?? 学者は女性向きの良い仕事だと思うのですが。。。

研究者の楽しみ

他の職業にはついていたことがないので、比較することはできませんが、本音を言うと、研究者として生活する上で女性だから困ったことはあまり記憶にありませんし、女性であったから困難な状況に置かれたこともありません。もしかしたら、周りが迷惑していたかもしれませんが、こればかりは本人は知るべきがなく、この点は不明。研究を生業としていて楽しいのは、新しい事象に意図せず突然にめぐり合えることでしょうか。走査トンネル顕微鏡で吸着分子の研究を始めたころは、見るもの全てが新鮮で、毎日が驚きの連続でした。百聞は一見に如かず。パラジウム表面に吸着したベンゼン分子がドーナツ状に見えた時は大感激。当時理化学研究所で一緒に研究をしていた吉信淳さん（現東大物性研教授）と大はしゃぎしました。真中に穴が空いてる、というのは感動し、 π 電子系が本当に輪になっているというのは大喜びという次第です。そう、当たり前のことが実際に見えることは、理解していた現象であってもスゴイ。感動です。そんな他愛もない日々にある日不思議なことがおきます。学生が持ってきた STM イメージには丸いはずのベンゼンの真ん中に筋が入り、まるでタラコが合わさったようなイメージが周期的に並んでいるのです。これは後に基板と分子との反結合性軌道による分子のイメージであり、ベンゼンの分子軌道の縮退が解けた軌道であることを突き止めるのですが、初めて見たときは仰天しました。こういう謎解きも研究のだいご味です。毎日の研究生活は単調ですが、時々出会うこういった刺激が楽しく、病みつきになるのでしょうか。

女性研究者に期待されること

研究者も職業となると研究以外の仕事も回ってきます。男女共同参画に関する委員や、セクハラ防止の委員会などは、女性であるがゆえに役目を果たすことが期待される仕事です。男女共同参画の委員は、女性として苦労したことなどの経験を元に、改善すべきことを提言することが期待されることです。若いころの経験で、二重保育などで結構物入りだったことを思い出し、「お金が必要です」と発言して少々響きを買ったことがあります。しばらくは必要経費だからと割り切って、給料のほ

とんどをつぎ込んだ時期には、本当にお金が欲しかったのですが。当時の期待される意見としては、「保育所を整備して欲しい」、「産休や育休を心おきなく取れるようにして欲しい」というあたりが順当な答えだったようです。

なかなか思うように上がらない女性比率も悩ましい問題です。高校生の女子に科学の道に進もうとする気持ちを遮るのは何なんだろうか？科学好きのおばさんには理由がわからないのです。機械工学を専攻したいと言われた時に、きっと家族は「そんな男みたいなことして将来どうなるのだろう」といって驚くのではないか。彼女からそう言われた高校男子は、「ちょっとまて」と思うのではないか。こういう想像はするものの、現実は何が彼女たちを科学、特に工学や物理学への世界へ踏み込ませない理由なのか、さっぱりわからないのです。こういうことって、科学嫌いになった人たちの意見を聞く方が良いのでは。

ロールモデルが必要だと言われても、深夜まで働く姿を見せると、「そんなにまでして学者として成功したいとは思わない」と言われて泣きそうになったことを思い出します。女性だから大変だったことはなくても、この道で極めるためには誰だってそれなりの努力をしているのです。それ以上でも以下でもない、普通の生活なのですが、何か特別なことを期待されているみたいで、普通じゃいけないのかなと考えてしまいます。マリーキュリーは普通のおばさんではありませんが、彼女の研究は単調な毎日の積み重ねであり、その努力が偉大な成果に結び付いたのでしょう。

少数民族の悲劇

唯一、女性で損したなあと思うことがあります。女性教員や研究者の誰もが同じ経験をしていると思います。ハラスメント関連の委員は男女比が1対1であることが

基本なので、数%しかいない女性教員はほぼ全員が駆り出されます。あまり心地よいとはいえない「問題」に絶えず耳を貸し、解決策を考え続けることになります。女性のみなさん、人間不信に陥らぬよう、気をつけましょう。世の中、そう悪い人ばかりじゃないはずですから。

政府系委員会への寄与の大きさも共通の悩みです。もちろん、文部科学省や内閣府の委員会にでられることは、ある意味科学行政の方向性を決める過程に参画できるので、大切なことではありますが、それにしても頻度は半端じゃない。母集団には10%程度しかいない女性研究者なのに、政府系委員会では30%ルールを課しているのですから、男性諸君の10倍働くことを前提とされているわけです。行く先々で同じ顔と会うので、委員を引き受けている女性研究者はみな顔見知りとなります。政府系の委員は、役所のしかるべき立場の方から打診されるので、若いころは断ってはいけないと勘違いしていましたが、これもできることはできるが、できること以上のことは無理と割り切ることで平穏な気持ちでいられるようになりました。

実は、女性であることで得することが多々あります。少し気の利いた仕事をすれば、名前を覚えてもらえます。これは大いなる利得です。国際会議では日本人女性であることは、さらなる利得です。珍しいので、研究内容の詳細はともかく存在は直ぐに記憶してもらえます。女性は物腰が柔らかいはずであるという先入観も、私の場合は、大いに得しています。直球で意見しても、先入観で和らいでしまうことがあるようです。これはラッキー!! です。

科学者は科学者であり、女性であるとか男性であるとかはどうでもいいこと。胸を張って楽しく生きていきましょう。